

# アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.210

November 2022

## 終わらぬ歴史、難民の歴史 ——ベトナム系難民の現在——

麻生享志

コロナ禍、ウクライナ危機と激動の時代に入った世界。マーク・トウェインの格言「歴史は繰り返さずとも、韻を踏む」とはすでに聞き慣れたものだが、それでも19世紀を代表する文豪の言葉には重みを感じる。目前にウクライナ避難民を見て思い出すのは、ベトナム戦争をきっかけに、総勢250万人が世界各国へと離散したベトナム系難民の存在だ。多くが南ベトナムとともに戦争を闘ったアメリカへ逃れた。

今では220万人の人口を誇り、アジア系4番目の規模に成長したベトナム系アメリカ社会、通称リトルサイゴン。当時幼くして脱越した若い世代、俗にいう1.5世代が成人しアメリカ社会で活躍するようになってから久しい。とくに過去20年のベトナム系の社会進出には目を見張るものがあり、文化・芸術の分野でも世界レベルで活躍するアーティストが後を絶たない。

その代表格といえるのが、ニューヨーク近代美術館にベトナム製ヘリコプターの実物とビデオ映像から成るインスタレーション作品を収めるティン・Q・レであり、小説『シンパサイザー』でピューリッツァー賞文学部門の榮譽に、ベトナム系として初めて輝いたヴィエト・タン・ウエンである。

レについては、2015年に東京と広島で個展を開いた親日派でもあるが、現在は祖国ベトナムに戻りスタジオを構える。ボート難民として家族とともに脱越したレがベトナムに戻ったきっかけは、祖国への思いに加え、世界の潮流から取り残されたベトナムの若手芸術家を育てたいという強い意志だった。とはいえ、現在もベトナムでは、文化・教育面での規制が強く、芸術作品には検閲すらある。祖国で活動を続けながらも、レが一度たりとも国内での作品展示を許されてこなかった背景である。

ウエンについては、続編『革命と献身』と併せ邦訳で読める。そのテーマは、戦時中南ベトナム軍に潜入した結果、アメリカへ亡命する羽目になったベトコン・スパイの目から見た戦後であり、より広い文脈では、およそ九割を占める白人読者から形成されるアメリカ文壇へのエスニック系作家としての挑戦だ。つまり、文化を決定

する最大要因は市場の意思であり、どの作品が選ばれ残るのかは、個々の作品の芸術性もさることながら、読者の嗜好による。文学研究者としてのキャリアももつウエンはこうした事情に精通し、それを逆手に取るかのように、アメリカ文学伝統にベトナム系ならではの視点から切り込む。

ところで、ベトナムでは国外に住むベトナム系の人々を越僑と呼ぶ。かつては統一政府による差別を受けてきたが、現在では、豊かな経済力と様々な知識をもつ越僑は積極的に受け入れられる。一方、越僑の祖国への感情は、郷愁の念の一言では表し得ない複雑なものであり、世代間にも大きな差がある。

たとえば、親世代の一世と子世代の1.5世でも、意識の隔たりは大きい。とくに保守的な一世の間では反共精神が強く、戦後しばらくはアメリカの支援の下、南ベトナムの再建・復興を期待する人々が多かった。かつてカリフォルニアで組織されたベトナム解放国民戦線や自由ベトナム臨時政府は、そうした人々の支持を集めた。

それとは異なり、アメリカで教育を受けた1.5世代の反応は穏健だ。また、アメリカ生まれの二世はまったく違った視点からベトナムを見る。1997年小説『モンキーブリッジ』で、1.5世代作家の先陣をきってデビューしたラン・カオの最新作『ランとハーラン』は、娘ハーランとの共著による自伝だ。いまだ自らを難民と呼ぶ母ランが、戦争トラウマによる苦しみを抱えつつもアメリカ社会でのサバイバル精神を示せば、アメリカ生まれのハーランは、今時のティーンエイジャーの世界をあっけらかんと語る。

その二人が帰越の旅で示す祖国への感情は、多様かつ複雑だ。母娘の対照的な語りからわかるのは、難民が歩む長い道のりのこと、異国でつくる家族のこと。そして、トラウマは世代を越えて受け継がれること。難民が言う「いまだ戦争は続いている」とは、まさにその通りなのだ実感させられる。

(早稲田大学)

## アメリカ学会役員一覧（2022～2023 年度）

### 会長

前嶋 和弘（上智大）

### 副会長

奥田 暁代（慶応義塾大）

中嶋 啓雄（大阪大）

中原伸之賞選考委員会委員長兼任

中原伸之賞選考委員会委員長兼任

### 常務理事

櫛田 久代（福岡大）

菅原 和行（福岡大）

板津木綿子（東京大）

麻生 享志（早稲田大）

菅 美弥（東京学芸大）

下斗米秀之（明治大）

渡邊真理子（専修大）

小田 悠生（中央大）

山岸 敬和（南山大）

佐藤真千子（静岡県立大）

豊田 真穂（早稲田大）

大串 尚代（慶応義塾大）

会務委員会会務担当

会務委員会会務担当

会務委員会財務担当

年次大会企画担当

年次大会企画担当

年次大会企画担当

年報編集委員会

国際委員会

英文ジャーナル編集委員会

広報・電子化情報委員会

斎藤真賞選考委員会

清水博賞選考委員会

### 理事

麻生 享志（早稲田大）

板津木綿子（東京大）

大津留（北川）智恵子（関西大）

小田 悠生（中央大）

貴堂 嘉之（一橋大）

佐久間みかよ（学習院女子大）

下斗米秀之（明治大）

杉山 直子（日本女子大）

土屋 和代（東京大）

中嶋 啓雄（大阪大）

西山 隆行（成蹊大）

松永 京子（広島大）

三牧 聖子（同志社大）

吉原 真里（ハワイ大）

石原 剛（東京大）

伊藤 裕子（亜細亜大）

岡山 裕（慶応義塾大）

兼子 歩（明治大）

櫛田 久代（福岡大）

佐藤真千子（静岡県立大）

菅 美弥（東京学芸大）

舌津 智之（立教大）

森口（土屋）由香（京都大）

中野耕太郎（東京大）

新田 啓子（立教大）

松原 宏之（立教大）

矢口 祐人（東京大）

渡邊真理子（専修大）

石山 徳子（明治大）

大串 尚代（慶応義塾大）

奥田 暁代（慶応義塾大）

川口 悠子（法政大）

坂下 史子（立命館大）

清水さゆり（ライス大）

菅原 和行（福岡大）

竹沢 泰子（京都大）

豊田 真穂（早稲田大）

西崎 文子（東京大・名）

橋川 健竜（東京大）

松本 俊太（名城大）

山岸 敬和（南山大）

渡辺 靖（慶応義塾大）

### 監事

大類 久恵（津田塾大）

小塩 和人（上智大）

佐藤 千登勢（筑波大）

### 評議員

青野 利彦（一橋大）

有光 道生（慶応義塾大）

和泉 真澄（同志社大）

遠藤 寛文（防衛大）

上 英明（東京大）

清原 聖子（明治大）

小濱 祥子（北海道大）

佐久間由梨（早稲田大）

白川 恵子（同志社大）

高内 悠貴（弘前大）

竹林 修一（東北大）

寺田 由美（北九州市立大）

中野由美子（成蹊大）

阿部 小涼（琉球大）

飯田 健（同志社大）

梅川 健（東京大）

大森 一輝（北海学園大）

北 美幸（北九州市立大）

倉科 一希（同志社大）

小森 真樹（武蔵大）

佐原 彩子（共立女子大）

諏訪部浩一（東京大）

高野 泰志（九州大）

佃 陽子（成城大）

中谷 早苗（東京都立大）

名和 洋人（名城大）

荒木 圭子（東海大）

石川 敬史（帝京大）

梅川 葉菜（駒澤大）

小野沢 透（京都大）

北脇実千代（日本大）

黒崎 真（神田外語大）

今野 裕子（亜細亜大）

下條 恵子（上智大）

関口 洋平（フェリス学院大）

高光 佳絵（千葉大）

常山菜穂子（慶応義塾大）

中野 博文（北九州市立大）

久野 愛（東京大）

廣部 泉 (明治大)  
牧野 理英 (日本大)  
丸山 雄生 (東海大)  
宮田 智之 (帝京大)  
矢島 宏紀 (昭和女子大)

藤本 龍児 (帝京大)  
待鳥 聡史 (京都大)  
南川 文里 (同志社大)  
森 聡 (慶応義塾大)  
渡辺 将人 (北海道大)

古井 義昭 (立教大)  
松井 孝太 (杏林大)  
宮田伊知郎 (埼玉大)  
森 丈夫 (福岡大)  
鰐淵 秀一 (明治大)

## 2022 年度アメリカ学会年次大会分科会報告

オンライン開催  
2022 年 6 月 2～4 日

### アメリカ政治分科会 6 月 3 日

第 56 回年次大会・アメリカ政治分科会では、3 名の会員がアメリカ政治の各分野における最新の研究成果について報告した。相川裕亮会員は、保守的なキリスト教徒の党派政治への関わりを、1970 年代に福音派の政治動員を試みたフランシス・シェーファーの建国の父祖理解に注目しつつ分析した。杉野綾子会員は、オバマ、バイデン両政権が金融機関への監督を通じて化石燃料産業への資金流入制限を図る中、いわゆる化石燃料投資撤退（ダイベストメント）の政策方針がどのように受容され、どのような政治論争を引き起こしているのか、特に大統領権限に注目して明らかにした。舟津奈緒子会員は、過去のアメリカ外交との比較やアメリカ外交の潮流との関係を通じて、バイデン外交の特徴を浮き彫りにするとともに、国内の党派対立や党内対立に象徴されるバイデン外交を推進する上での課題について考察した。いずれの報告も、変化の激しい今日のアメリカ政治を考える上で大変有益な視点を提供するものであった。参加者からも数多くの質問が寄せられ、閉会の予定時刻を過ぎても活発な議論が展開された。

(宮田智之)

### アメリカ国際関係史研究分科会 6 月 3 日

吉留公太会員（神奈川大学）の『ドイツ統一とアメリカ外交』（見洋書房、2021 年）の合評会を行った。同書は、近年公開されたアメリカや各国の膨大な一次資料と国際的な研究動向を踏まえて、ジョージ・H・W・ブッシュ政権の対ソ・対ヨーロッパ政策を解明し、ドイツ統一交渉の経緯を詳細に分析することによって、ヨーロッパ地域における冷戦の終結過程の全体像に迫っている。

まず吉留会員が執筆の意図と概要について報告した。冷戦の終結をめぐるアメリカ外交を、勝者と敗者とを明確に分ける「勝敗区分的冷戦終焉観」と、東西両陣営の融和とみる「東西融和的冷戦終焉観」のせめぎ合いから論じた、と説明された。これに対して、評論者の佐々木卓也会員から、そもそも冷戦をいかに定義しているのかなど大きな質問があった。

フロアからは、デタントや新冷戦からいかなる長期的なつながりがあるのか、1989 年東欧革命からの激動をブッシュ・シニア政権がいかに認識していたのか、などについて質問があった。

吉留会員の著作は、アメリカ学会清水博賞を受賞した。「プーチンの戦争」もあり、今日的な示唆にも満ちている。

(島村直幸)

### 日米関係分科会 6 月 4 日

2022 年度の「日米関係」分科会報告では、村岡敬明氏（明治大学研究・知財戦略機構）による「西銘県政における沖縄の公共政策」、東江日出郎氏（東北公益文科大学）の「米中冷戦とドゥテルテのフィリピン外交」と題する報告をいただいた。

村岡報告において、米軍基地問題を解消するには整理・縮小と将来的な廃止を考えた西銘順治は、飲料水を提供する北部ダムへの米軍演習による汚染問題に関して、2 度の訪米を通じてアメリカ政府高官との信頼醸成を試みた。また革新系の前屋良県政期に生じた基地廃止による経済的打撃を受け、衆議院議員時代に自民党田中派に所属していた経緯から、観光産業育成だけでなく港湾開発を推進したことが、県民の雇用創出には極めて重要であったことが報告された。

東江報告では、「自立」と「従属」の観点から、フィリピンのドゥテルテ大統領の外交安全保障政策を検討した。ドゥテルテ大統領は前政権の外交政策を転換するに至り、前政権からの国軍近代化の継続・強化、対中融和、アメリカとの一定の距離、外交安全保障関係の多角化を行なった。ただ、これらの転換は戦後比国外交を形成した「均衡・均等外交」の延長であり、彼の対中融和姿勢は前大統領アロヨの思想を受け継いでいることなどが報告された。

報告後のフロアからは、西銘による普天間基地に関する構想について、比国の「均衡・均等外交」の中でのドゥテルテ外交の位置付け、ドゥテルテの対米認識、比国からの米軍撤退が沖縄米軍基地に一層重要性を与える中で米軍基地問題を考えるべき、など多数の質問がなされた。

(末次俊之)

### 経済・経済史分科会 6 月 3 日

手塚沙織会員（南山大学）から「移民政策における新興勢力としての米 IT 産業」のテーマで報告がなされた。その内容は、特定 7ヶ国出身者に対する一時入国停止やシリア難民認可プログラムの停止を盛り込んだトランプ大統領令 13769

に対して、フェイスブックなど米 IT 企業が起こした行動のインセンティブを国際経済の観点から論じたものであった。

社会問題への表立った意見表明は政治色が強く表れ、株主や従業員、消費者といった幅広い層から批判が出る可能性が高いため、経営者や企業はそういった行動を控える。にもかかわらず、IT 企業は同様の意見表明を含めた移民政策への活動を活発化させている。本報告は、なぜ米 IT 企業が移民政策に対して内外に意見を示すのかを明らかにすることであった。結論として、米 IT 企業が雇用する高度人材の中でもアジア出身者の割合が増加している一方で、中国の IT 企業を始めとしたリクルート上の競合相手が増え、人材競争が激しくなっており、米 IT 企業が高度外国人材を確保し続けるためには、移民政策に対して寛容な立場であると発せざるを得ないとした。米 IT 企業にとって、それが人材確保の戦略上の最適解だとした。フロアからは、「IT 企業の政治的主張の特色は何か」などの質問があり、活発な議論が交わされた。米 IT 企業の政治的特色は、他の産業と比べ、経営者と従業員の平均年齢が若く、ユーザー（消費者）も若いため、若年層の多数派を占めるリベラル派の考えと重なっているのではないかと回答した。

(名和洋人)

#### アジア系アメリカ研究分科会 6月2日

「アジア系アメリカ研究分科会」は6月2日(木)18:00~19:30にオンラインで実施された。尚、当日は責任者野崎の私的事務により、司会を次期担当者の和泉会員(同志社大学)に依頼した。発表の内容は、以下の通りである。

分科会では発表者山中美潮会員(上智大学)が「20世紀初頭のアメリカ南部・メキシコ湾岸地方と日本人移住—稲作と人種関係」と題する報告を行った。本報告は、20世紀初頭のアメリカ南部が日米の帝国拡大を巡る接合点であったと位置付ける。山中氏はまず20世紀初頭に数百人の日本人がテキサス州を中心とするメキシコ湾岸地方に移住したことを指摘、その背景に再建期以降のアメリカ南部における稲作の拡大と、日本政府によるハワイ・太平洋沿岸部に代わる移住地模索があったことを明らかにした。次にテキサス移住の中心人物であった西原清東らの言説を中心に、日本人入植者がジム・クロー体制を受容しながらも、稲作技術や育種の成功を根拠に自分たちの人種的優越性を見出していたことを考察した。最後に、山中会員はこのテキサスでの経験が環太平洋世界における日本人入植者の人種観などに影響を及ぼしたのではないかと示唆した。フロアからは日系アメリカ人研究だけでなく、黒人史、移民法制史の観点からも質問があり、活発な議論が交わされた。

(野崎京子)

#### アメリカ女性史・ジェンダー研究分科会 6月4日

弓削尚子氏(早稲田大学)による著書『はじめての西洋ジェンダー史—家族史からグローバル・ヒストリーまで』(山川出版社, 2021年)についての合評会をおこなった。家族史、女性史、ジェンダー史、身体史、男性史、軍隊の歴史、グローバル・ヒストリーといったこれまでの歴史学のアプローチの変化をたどりながら、西洋の歴史をジェンダーの視点から考察したこの本について、まずは著者より紹介された。本書がジェンダーの歴史的構築性について考えるきっかけとなることを期待して書かれたこと、ジェンダー史という視角が歴史学だけでなく様々な学問領域にも必要とされるものであることについてなどが語られた。その後、兼子歩氏(明治大学)と小檜山ルイ氏(東京女子大学)によるコメントがされた。兼子氏からはアメリカ史研究から見て語られていないものを通して同書のさらなる可能性について、小檜山氏からは「西洋」のジェンダー・システムを理解するうえでの宗教の役割についてなどのコメントがされた。分科会には47名がオンラインで参加し、フロアから西洋史のなかでのアメリカ史の位置や、ジェンダー史と女性史の関係、ジェンダー史研究の持つ政治性についてなど、活発な議論が交わされた。

(鈴木周太郎)

#### アメリカ先住民研究分科会 6月3日

今年度の分科会には、アメリカ学会開催に合わせて OAH から派遣され来日していたオクラホマ州立ノースイースタン大学のフェリーナ・キング先生を迎え、「世代を超えたディネ女性の施療と COVID-19」と題する報告がオンラインで行われた。報告ではキング先生も属するナヴァホ・ネイションにおける新型コロナウイルス感染症の蔓延と、それと闘うディネ(ナヴァホ族)の医療従事者や一般の人々の活動について、証言映像をまじえながら説明が行われた。その際に特に焦点が当てられたのが、ディネの女性たちが歴史的に担ってきた治癒者(ヒーラー)としての役割と、ディネ文化に根差した自然との調和を求めて生きる哲学の重要性であったが、それらこそロングウォーク(強制移住)をはじめとする幾多の植民地主義による苦境をディネが乗り越え、生き延びてきた際に支えとなった社会・文化的基盤の一つであったこと、そしてそれは今回のパンデミックに際しても同じであることが論じられた。新型コロナウイルス感染症は、あらゆる集団のうち特にアメリカ先住民に甚大な被害を与えてきたが、今回の報告はそれを克服しようとする際に先住民の「伝統文化」がどのように機能するのかを考える上で多くの示唆を与えるものであった。

(佐藤 円)

#### 初期アメリカ分科会 6月3日

今回の分科会では、遠藤寛文氏(防衛大学校)による「欧州帝国内抗争の境界域としての北米辺境—1812年戦争期の西フロリダ併合政策(1810~1813年)を中心に」と題した報告が行われ、さらに森丈夫氏(福岡大学)から遠藤報告へのコメントが寄せられた。19世紀初頭のスペイン領東西フロリダを、ヨーロッパ諸帝国の支配や影響が重なり合う境界域と捉える視座に立つその報告では、一次史料を駆使して、境界域ゆえの西フロリダをめぐる複雑な実情、す



なわち欧州帝国を意識するマディソン政権の意図、現地住民の思惑や帰属意識、米西現地官吏による交渉の経緯などが明かされた。そのうえで遠藤氏は、現地における支配権の確立に伴う境界域の衰退を指摘し、西フロリダ問題を、北米大陸をめぐる秩序の再編として捉え直した。そして植民地時代の境界域に明るい森氏からは、遠藤報告の研究史上の位置付けの整理や、18世紀におけるボーダーランド危機との比較を通じたコメントに加えて、遠藤氏への質問が提起された。フロアからも多くの質問やコメントが寄せられ、予定時間を延長して活発な議論が交わされた。金曜日の夕刻にオンライン形式で開催された本分科会には、25名が参加した。

(笠井俊和)

#### 文化・芸術史分科会 6月3日

今回の分科会では、「虚ろなアメリカの魂——1950年代シカゴの歴史記録としての『クライ・オブ・ジャズ』(1959)」というタイトルで山田優理氏(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)に報告を行ってもらった。まず山田氏は、作曲家エド・ブランドを中心した独立系映画製作会社が手掛けた短編映画『クライ・オブ・ジャズ』を参加者に紹介しながら、そこに見られる特異な文化的・歴史的・芸術的価値を分析していった。山田氏によると、本作品は、ジャズの音楽的構造と米国社会で黒人であることとの間に「自由と制限」という類似点や共通項を見出そうとする大胆な試みであり、そこには黒人としてのアイデンティティの強調など、時代を先取りした特徴が見られると言う。また、作品中に描かれる人種やジェンダーを軸とした人間関係は1950年代シカゴの社会状況と密接な関係があり、そういう点で本映画は当時の音楽をめぐるインターレイシャルな社会空間を垣間見ることのできる記録であるとともに、当時構築されつつあった「公式な」ジャズ史やジャズの聴取法に対する挑戦でもあったと山田氏は主張する。とりわけ、人種統合が進まないハイド・パーク地区に黒人として暮らしたブランド自身の経験を強調することによって、本作は公民権運動の主流言説とは異なる戦後リベラリズム批判としても評価できると論じた。

(小林 剛)

#### アメリカ社会と人種分科会 6月3日

2022年大会では、山本航平会員(同志社大学嘱託講師)が、「連帯と交渉——20世紀前半キューバ・アメリカ合衆国間におけるアフリカ系の人的ネットワーク」と題した報告をおこなった。まず山本会員は、キューバにおける黒人奴隷制や人種分離・差別の様相を確認したのち、20世紀初頭にアラバマ州のタスキーギ師範・産業学院に留学したアフロキューバ人(アフリカ系キューバ人)の動向について論じた。1886年の奴隷制廃止後も、キューバでは黒人の教育機会が限定されていたため、比較的富裕なアフロキューバ人のあいだでは、米国への留学を望む傾向があったという。また、本報告ではアフリカ系アメリカ人からアフロキューバ人に向けられたまなざしについても分析された。ブッカー・T・ワシントンに代表されるアフリカ系アメリカ人教育者は、キューバの「同胞」に産業教育を施し、「自助」の精神や規律、道徳を内面化させることを目論んでいたが、彼らのこのような思惑を留学生は全面的に受け入れてはなかったと結論づけられた。

報告後の質疑応答では、アフロ・キューバ人留学生の学習内容やキャリア、ラテンアメリカからの黒人留学生の「アメリカ化」など、多岐にわたる論点をめぐって活発な議論が展開された。

(戸田山祐)

### OAH 年次大会への参加費用補助のご案内

2023年3月30日から4月2日まで、ロスアンゼルス(Westin Bonaventure Hotel and Suites)においてOrganization of American Historiansの年次大会が開催されます。アメリカ留学中の大学院生会員の皆様には、この学会の旅費および宿泊費が補助される制度があります。本制度による給付を希望される方は積極的にご応募ください。

#### 1. 応募資格：

①アメリカ学会の会員であること。

\*応募時にアメリカ学会への入会手続中である場合はその旨明示すること。

②日本国籍または日本での永住権を持っていること、あるいは日本との強い結びつきがあると認められること。

③アメリカ合衆国内の大学院に正式に所属していること。

④応募時にアメリカ国内に在住していること。

#### 2. 審査基準

受給経験者の再応募も可とするが、応募者が多数の場合は、受給経験のない方を優先するものとする。

#### 3. 応募方法、提出書類

①参加希望者は、氏名、所属大学院、留学期間、専攻領域、日本の出身校名、過去のこのプログラムあるいはAmerican Studies Associationの同様のプログラムへの参加経験(ASAとOAHそれぞれの参加年度と、その時に発表を行ったか否か等)、2023年度OAHでの発表予定の有無を明記の上、電子メールでアメリカ学会国際委員会担当の佃陽子(tsukuda@seijo.ac.jp)まで、2022年12月1日から2022年12月31日までの期間に

応募すること。

②参加者には全日程への参加と、大会終了後2週間以内に英文での参加報告書の提出が求められる。

なお、事務局での混乱を避けるため、応募メールの件名は「OAH 参加費用補助応募（2023）」と必ず明記してください。この年次大会の情報は、<https://www.oah.org/meetings-events/oah23/>を参照してください。

国際委員会

~~~~~

## アメリカ学会海外渡航奨励金 — 国外の学会やシンポジウムで発表する方を対象とする助成制度のご案内 —

このたびアメリカ学会では、国外での学会やシンポジウムにて発表する方を対象に、以下の要領で渡航奨励金を支給することになりました。本制度による給付を希望する方は積極的にご応募ください。なお、今回（後期）の対象は、2023年3月～7月に開催される学会です。

### 1. 応募資格：

- ①アメリカ学会の会員であること。年会費の滞納がないこと。  
\*応募時にアメリカ学会への入会手続中である場合はその旨明示すること。
- ②国際学会やシンポジウムでの発表時に、日本に在住し、日本からの旅費を要すること。
- ③発表内容がアメリカ研究に関するものであること。
- ④大学院生等の若手研究者を優先的に検討し、そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

### 2. 審査基準：

- ①大学院生等の若手研究者を優先する。大学院生については発表をしない場合も応募可能。
- ②American Studies Association, American Studies Association of Korea, Organization of American Historiansのいずれかの年次大会で発表する方を優先するが、これら以外の国際学会やシンポジウムで発表する場合も応募できる。（ただし、ASAとASAKは、開催時期が今回募集の対象外）
- ③他組織からの援助のないものを原則として優先する。
- ④そのほか、助成の必要性、発表の内容を総合的に判断する。

### 3. 応募方法、結果発表、発表後の提出書類

- ①次の書類を12月16日～31日までの期間に、国際委員 中谷早苗 (sanae.nakatani@tmu.ac.jp)宛に送ること。応募メールの件名を「JAAS 海外渡航奨励金応募」と明記すること。
  - (1) 履歴書
  - (2) 業績書
  - (3) 発表が受け入れられたことを証明する文書（電子メール可）
  - (4) 発表のタイトルと要旨（英語で250～300語程度とする）
  - (5) (ASA, ASAK, OAH以外での発表の場合のみ) 当該国際学会やシンポジウムに関する情報（目的、歴史、規模等、字数は指定しないが、簡潔で正確であること）
  - (6) 理由書（奨励金を必要とする理由。他組織からの援助のないものを原則として優先するので、申請時にほかの組織による援助を申請中か、あるいは援助を受けることが決定した者は、その旨明記すること。ほかの組織による援助のなかには、所属機関の研究費を充当する予定も含む。なお、旅費・宿泊費（実費）の不足部分に限り、他の補助金との併用が認められる。）
- ②審査結果は、1月中に応募者に通知し、学会HPで公表する。
- ③発表終了後、2週間以内に報告書（邦語1200字程度あるいは英語500語程度とする）および領収書の原本（旅費・宿泊費）を提出すること。

### 4. 支給額

アジア圏の場合は一人5万円、アジア圏外の場合は一人15万円を原則とする。

国際委員会

~~~~~

## 会員のみなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局 (office@jaas.gr.jp) までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようお願いいたします。

小澤奈美恵 著

『アメリカン・ルネッサンス期の先住民作家  
ウィリアム・エイブス研究——蘇るピー  
クォット族の声』

(明石書店, 2021年, 5,720円)

先住民文学なるものが知られるようになるのはN. スコット・モマディの『夜明けの家』がピューリッツァー賞を受賞してからだと言われている。それ以後の先住民文学の隆盛期はネイティヴ・アメリカン・ルネッサンスと称されるが、本書が扱うのは19世紀のアメリカン・ルネッサンス期に活躍した先住民作家ウィリアム・エイブスである。アメリカン・ルネッサンス期には白人男性を中心とした名だたる作家がアメリカ文学史上主要な作品を残した。文学史を紐解けば彼らの名前と著作は当然のように紹介されている。ならばエイブスはどうか。本書は、アメリカン・ルネッサンス期の作家でありながら日本においてはほとんど顧みられることがなく、また、同時に活躍した主流作家との関連性において論じられることが少なかった彼の声を掘り上げ、アメリカン・ルネッサンスの文学を新たな視点から読み直す可能性を探ろうと試みるものである。

本書は作品研究と主要作品二作の全訳から成る。『森の息子』論は、エイブスが回心体験物語をはじめさまざまな支配者の物語形式をいかに転換し先住民の権利主張の手段としたかを、先住民自伝に関する緻密な先行研究の上に明かす。続く『キリスト王国の繁栄—説教』と『インディアン—消えた十部族』論は、エイブスの千年王国論が先住民の地位の復権を目指した支配者側の千年王国論の逆用であることを示す。「白人に示すインディアンの鏡」論は、エイブスが回心体験物語の形式やキリスト教の論理をいかにして白人社会を批判することに転用しているかを議論し、『マシユピー族に関するマサチューセッツ州憲法違反の法律のインディアンによる無効化、あるいは、暴動と称される件の釈明』論は、エイブスの奴隷制廃止運動家との共闘と啓蒙主義の論理を用いた先住民自治の獲得の過程を示す。『フィリップ王への讃辞』論は、エイブスが従来のフィリップ王解釈をどう解釈し直し白人社会批判へ繋げたかを論じ、最終章は、アメリカン・ルネッサンス期の作家の中でもエマソンとソローの先住民観を探り、更に、ポーのゴシック的ヴィジョンに隠される先住民問題の可能性を検証する。

本書が試みる、エイブスを介したアメリカン・ルネッサンス文学の相対的な見直しから見えてくるのは、支配者白人の言説を読み替えて先住民の声に転換するという、現代の先住民作家に通じるエイブスの文学的戦略である。従来の研究が主にネイティヴ・アメリカン・ルネッサンス以降の小説を中心に行われてきたことへの反省から、近年のアメリカ先住民文学研究においては、エイブスの作品も含めたノンフィクション作品の見直しとともに、ノンフィクションというジャンルの持つ文学的可能性の探究が深まりつつある。既存のものを別の視点から見直すことがもたらす可能性を示す本書は、先住民文学研究はもとより、より広い文学研究においても有用な足掛かりとなるであろう。 矢ヶ部あかり (福岡女子大学・講)

岡山 裕 著

*Judicializing the Administrative State:  
The Rise of the Independent Regulatory  
Commissions in the United States, 1883-  
1937*

(Routledge, 2019年, \$ 48.95)

本書は、アメリカ合衆国において成立した行政国家の特質についての研究である。

行政国家化は、世界的に広く生じた20世紀的な政治現象の一つである。行政国家化とは、民意を代表する議会ではなく、専門的知識と技能を備えた人びとの機構である官僚制が、国民の生活や経済活動に責任を負い、かつ、介入する国家形態が現われたことを指している。それは、端的に執行権に属する行政機構の肥大化として語られることが多い。このような特徴をもつ行政国家化についての研究は、これまで、概して、執行権のもとにある行政機構の機能の分析、すなわち、専門的技能をもった集団である官僚制の実態分析や議会からの官僚制の自律性の度合いなどの考察としておこなわれてきた。合衆国における行政国家化の考察が、アメリカ的な特質を捉えることができなかった理由はそこにある。

これまでの政治学の研究では、執行権者(大統領)のもとに一元的に統合された「ウェーバー的な意味での階層的な国家」は合衆国には成立せず、一体性を欠く「寄せ集め」のような行政機関が林立しているというのが、一般的な見解であった。

それとたいして、本書において、新たな行政国家像として示されるのは、司法的行政国家である。合衆国では、行政国家化は、(1) 執行府の官僚制の肥大化としてよりも、執行府の外に合議制の機関として設けられ大統領の権限が制限されている独立規制委員会が行政機能の重要な役割を果たしてきた点に注目してこそ、その特徴をよりよく把握できるし、かつ、(2) 執行府の官僚制も含めて、行政機構が「司法化(judicialization)」してきたこと、すなわち、決定の手続きが裁判所に類似していることが特徴である。このような指摘自体は、本書の独自の知見ではない。これまでの研究への本書の貢献は、「非司法的行政機関が司法化されることをとおして法廷手続きの特性を帯びていく」過程をあきらかにした点にある。さらに、行政国家化の分析を「きわめて高度な疑似法廷的な国家(courtlike state)」の登場という視点から解明した点も、新たな手法である。

本書は、国際通商委員会、連邦準備制度理事会、連邦取引委員会などの独立規制委員会の設立をめぐって、大統領、連邦議会、裁判所(および法曹)が、「効率性」と「公正性」という二つの価値をどのように捉え、それらの価値を行政国家化にどのように組み込もうとしたのかを考察することによって、行政国家化を「効率志向のウェーバー的官僚制」の整備という観点から捉えがちであった従来の研究では見えていなかった行政国家の司法化の動態をあざやかに描き出している。本書を読むならば、政治権力の「第四の部門」(いいかえれば、いずれの統治機構にも属さない)として捉えられがちであった独立規制委員会が、三権分立の原理が作用するなかでどのような性質を帯びていったのかを知ることもできる。

なお、本書は、第一回中原伸之賞受賞作品である。

中野勝郎 (法政大学)



松本 昇 監修

深瀬有希子・常山菜穂子・中垣恒太郎 編著

『ハーレム・ルネサンス

——〈ニュー・ニグロ〉の文化社会批評』

(明石書店, 2021年, 8,580円)

本書は、100周年を迎えたハーレム・ルネサンスの「全体像」を捉えることを目指した総数600頁を超える壮大な研究書である。広範な学問領域の研究者たちが「1920年代のハーレム地区」に固定されがちな従来の枠組みを分野横断的かつトランスボーダーな視点から再考し、より流動的な文化現象としてハーレム・ルネサンスを捉え直す。

本書は四部で構成されている。第I部『「ハーレム・ルネサンス」の見取り図』では、まず有光道生が本運動を俯瞰的な視野から再評価し、本書の基調を作る。奥田暁代と深松亮太はハーレム・ルネサンスの文化的政治的源流を19世紀に求め、歴史の連続性を示す。大類久恵のガーヴィー論はこの運動を地理的制約から解放し、黒崎真と川島浩平は黒人宗教とスポーツ言説の文脈からハーレム・ルネサンスの新しい地平を拓く。第II部「トランス・ナショナリズム／コスモポリタニズム」は、黒人モダニズム運動のトランスナショナルな拡散の過程を辿る中村隆之論文で幕を開け、齊藤みどりと古東佐知子のマッケイ論が続く。三宅美千代はロンドンで模索されたパン・アフリカ主義的連携の諸相を詳らかにし、竹谷悦子はハーレム・ルネサンスの文化的想像力を航空文化史の文脈に描きこむ。第III部「広がる表象芸術の地平」では、大和田俊之がハーレム・ルネサンス期に至る黒人音楽の形成過程を明らかにし、佐久間由梨はミドルブリュー・ジャズの芸術性を指摘する。松田智穂子のパジェント劇論と常山菜穂子の演劇論は、演劇活動に携わる黒人民衆の多層性を浮き彫りにする。梶原克教は、ハーレム・ルネサンス期に底流する運動する身体への文化的関心を紐解く。中垣恒太郎の手によるオスカー・ミショー論と田中正之のアーロン・ダグラス論は、アフリカ系表象芸術家が主流白人芸術から影響を受けつつも、それを超克し独自の芸術を創出していく道程を辿る。森あおいは、他者に占有される黒人芸術家の自己表現の機会を回復せんとするトニ・モリスンの戦略を論じる。第IV部「交錯する芸文の世界—小説・詩・民族誌的想像力」は、文学領域におけるハーレム・ルネサンスの時期を見定める鵜殿えりか論文で始まり、女性作家の活躍を再評価する山下昇が続く。千代田夏夫はハーレム・ルネサンス文学における非規範的性的ゴシック的表象を分析し、齊藤修三はカレンとヒューズの詩学を丹念に読み解く。西垣内磨留美とハーン小路恭子は、南部をキーワードにそれぞれハーストンとトゥーマーの独特な立ち位置を検証する。深瀬有希子による最終章は、モリスンが『ジャズ』の中で描く黒人の生の在り方にハーレム・ルネサンスの文化的政治的成果を見出す。

以上みてきたように、ハーレム・ルネサンスを包括的に再定位するという本書の試みは見事に達成されているといつてよい。多彩な切り口でハーレム・ルネサンスを見つめ直す本書は、黒人文学研究者のみならず、人種、歴史、政治、芸術など様々な分野の専門家にとって必備の一冊となるだろう。 岡島 慶 (日本大学)

巽 孝之 監修

下河辺美知子・越智博美・後藤和彦・原田範行編著

『脱領域・脱構築・脱半球

——二一世紀人文学のために』

(小島遊書房, 2021年, 5,280円)

本書は、慶應義塾大学を定年退職した巽孝之氏を祝う記念論文集である。「脱領域・脱構築・脱半球」とするタイトルは「ここ半世紀ほどの人文学的展開を、共に歩んできた友人たちと改めて再確認しておきたいと希望した」巽氏が名づけた。その趣旨に応答すべく学界の錚々たる陣容から寄せられた20編の論文(全410頁余)は、いずれも大いに読み応えがある。そればかりか、本書の何よりの特徴である「代表的批評家30選——交響する理論」編が充実しており、記念論文集の域を超えている。選定された海外批評家30名の受容について、主に日本人研究者がそれぞれの「思い入れ」を込めた論評30編(全120頁)を寄せ、じつに興味深い。I・A・リチャーズからワイ・チャー・デモックまで、覚えのある批評家名が生年によってクロロジカルに並べられ、その理論の交響が監修者巽氏の先述の希望を補完する一方、読み手はそれを俯瞰することができる。こうして総勢50名の論者が、1970年代から21世紀の今日までを中心に、日本の英米文学研究ならびに批評の場を席卷した「理論の時代」を再確認するのである。

巽氏は冒頭に「人文学の未来と批評的想像力」と題する論考を寄せており、華麗さを抑えた、落ち着いたその文章の中で自身を語り、氏の批評活動の原点を明かす。高校3年時に観劇したベケットの「ゴドーを待ちながら」を契機に、のちに作品テキストを読み、新約聖書における四福音書の「同一場面に関する記述上の決定的齟齬」の存在を初めて実感するのである。「ローマン・カトリックの幼児洗礼を受けた」身にとって、「聖書テキストに懐疑心を抱く」発想は皆無だった。だが、この体験を通して「〈読む〉ことの果てに〈戯る〉」がありうること、しかもそれが聖書ゆかりのものであることを認識したのが、氏の中に「批評的想像力が立ち上がる瞬間だった」という。もしかしたらそれは、ジョージ・スタイナー著『脱領域の知性』(由良君美他訳)への巽氏の共感と開眼の瞬間だったかもしれない。スタイナーは「バベル崩壊後のカオスを……豊饒な〈多種多様性〉とちゃんと捉える意力と方法さえ見失わなければ望みはある」(高山宏論評)と説くのである。

脱構築が展開中のアメリカ1980年代半ば、巽氏はコーネル大学ジョナサン・カラーの下で学び、博士号を取得する。「彼はカラーの教育学が生んだ最良の効果だ」(折島正司論評)と評されるのであり、脱構築を、ついで脱半球を論じる。こうして本書は「批評理論とその時代」を振り返りながら人文学の今後をも見据える。その作業は、たとえばカントの『地震論』(黒崎政男論文)に見ることく、ヨーロッパ思想の大きな転換点(すなわち啓蒙思想の誕生時)に遡る歴史的パースペクティブを脱領域的に備えた思索の中で壮大に展開する。類書にないこの稀有な大著の出版を慶びたい。巽氏への敬愛の念が滲む「あとがき」(下河辺美知子氏)が心にしみる。

井川真砂 (東北大学名誉教授)



佐久間みかよ 著

『個から群衆へ——アメリカ国民文学の鼓動』

(春風社, 2020年, 3,740円)

本書は、人の移動という観点から、アメリカ合衆国の国民文学がどのように形成されてきたかを考察した研究書である。独自性をもった個人が、様々な境界を越えて移動するとき、そこに摩擦と共鳴を生み出しながら、やがて多様性をもつ群衆が形成されていく。本書は、そうした「よりよい生を求めて様々な人々が動いてできたアメリカ合衆国」の国民文学を、民主主義の文学として捉え、植民地時代から現代に至るまでのアメリカの文学作品を詳細に分析することで、民主主義文学としてのアメリカ文学の特徴を読み解いている。

全10章から成る本書が扱う作家は、主に、シェパード、エドワーズ、ホーソーン、エマソン、メルヴィル、トウエイン、デュボイス、サンドラ・シスネロスである。綿密な作品分析が展開する各章を通し、こうした多岐にわたるアメリカ作家たちに共通して見られる点は、地理的または内的な境界を越境し移動する経験が、作品に表れるそれぞれの独自性や内省のあり方に影響を与えていること、さらにはこうした変容が、個々の作家にとって、アメリカ像を新しい視点から捉え直すきっかけとなっていることである。多様な移動の形態の中でも、例えば地理的な移動の例として本書は、エマソンの西部講演旅行、メルヴィルやトウエインのハワイ訪問、メルヴィルの地中海・中近東地方への旅、デュボイスのアメリカ南部への移動、シスネロスのメキシコとアメリカの越境等に焦点を当てている。

さらに本書は、「個」が「群衆」へと変容していくその過程でアメリカが内包する二面性に言及し、そうした矛盾に作家たちがそれぞれどのように向き合ったかを浮き彫りにする。個人の声や認識、個性や独自性が重要視されるアメリカで、個人が集団を形成する際、そこに帰属しない他者のそれらを埋没させる危険がある。また、個人の信念に基づいた改革を行うには、集団や共同体の力が必要になる一方で、その集団性は、個々の独自性や個性を喪失させてしまう危険性を孕む。本書では、アメリカの持つ二面性が、例えば、信仰心と理性を重視するエドワーズの二面性に体现される点が考察される。あるいは、アメリカの二面性がもたらす緊張や不安は、エマソンやホーソーンなど19世紀の知識人たちが共同体に対して抱いた懸念の中にも見られることが指摘される。さらには、詩人としてのメルヴィルが、個人の死を悼む喪の作業として紡いだ『戦争詩集』の中にそれが見え隠れする点が論じられる。

人の移動というテーマのもとに考察される本書は、アメリカ文学研究者にとって重要な研究書であるだけでなく、専門家以外にも手に取りやすい一冊である。本書の全体を通して読者は、著者の鋭敏な分析によって明瞭になる作家たちの多様な騒めきに耳を傾け、その流れに身を委ねることで、ダイナミックなアメリカの歴史を追体験し、アメリカ文学の奥深く雄大な世界に誘われるのである。

名和 玲 (上智大学・院)

鈴木七美 著

『アーミッシュキルトを訪ねて

——照らし出される日々の居場所へ』

(大阪大学出版会, 2022年, 2,970円)

アーミッシュは、電線から供給される電気の不使用、馬車での移動など、伝統的な生活様式を維持していることで知られるキリスト教徒である。そのようなアーミッシュの日常生活に彩りを与えるキルトは、アーミッシュ・キルトと呼ばれ、アーミッシュ社会の中で重要な役割を果たすものとされてきた。キルトは出産、結婚、旅立ちといった、人生の節目を象徴すると同時に、主流アメリカ社会との複雑な交渉や交流の過程を体现する物質文化である。ところが、名もなき一般の人たちが作ったり、使用したりしてきたキルトのような日用品は、ミュージアムなどに収集される過程で、文化的コンテクストが失われてしまうことが多々ある。

本書では、国立民族学博物館が所蔵するキルトをはじめとするアーミッシュの日用品が取り上げられている。取り上げられたキルト作品の多くは、著者の長年にわたる現地での聞き取り調査によって、詳細な情報を与えられている。現地の人々との交流やかれらの生活が生き生きと描かれ、生活用品が体现するアーミッシュ文化を大きな歴史的文脈の物語に落とし込みながら、読者をアーミッシュの世界へと導いてくれる。

本書の語りは著者とアーミッシュ・キルトの出会いから始まる。その後、アーミッシュの起源である16世紀ヨーロッパにおける宗教改革へと歴史を遡り、18世紀初頭に信仰の自由を求めて北米へと移住し、社会の変遷とともに変化してきた現代のアーミッシュの日常生活へと進んでいく。その過程で、アーミッシュ社会が静的ではなく、常に主流アメリカ社会からの影響を受けながらも、独自の社会を維持、強化してきたことが指摘される。とりわけアーミッシュ居住地区の観光地化については、かれらに対して経済的利益をもたらすだけではなく、アーミッシュ文化の補強にもつながっていることが述べられている。このことは、現代アーミッシュ文化の維持や変化の過程を理解する上で、重要な論点である。

一方で、主流アメリカ社会によって商品化される過程で構築され、再強化されたアーミッシュ文化が、無意識的にアーミッシュ自身によって内在化されていることは無視できない。その点において、現在ではアーミッシュ自身も使用するキルトのパターン名が、本書では予め自明なこととして記述されている点は気になった。20世紀初頭からアーミッシュが制作してきたキルトのパターンにつけられた名前、実は1970年代にアーミッシュ・キルトを「発見」し、美術品としての価値を高めることに影響を与えた美術コレクターによって名付けられたものである。この問題を著者がどのように解釈するかは、今後の著者の研究に期待したい。

アーミッシュ社会と日本は、一見相反する社会のように見えるかもしれない。しかし、終章で「誰をも一人にせず、諦めずにもに生きる試みは、世界の人々に伝わるメッセージとなっているのではないか」と提示されているように、アーミッシュ社会のあり方は、日本における共生社会の形成にも大きなヒントを与えてくれるのではないだろうか。

野村奈央 (埼玉大学)

西崎文子 著

『アメリカ外交史』

(東京大学出版会, 2022年, 4,180円)

本書は、建国期からトランプ政権期に至るアメリカの外交史を振り返る、詳細な概説書である。約250年の歴史を12の時代(章)に分けた上で、各地域(ヨーロッパ、ラテンアメリカ、東アジアなど)に対するアメリカの政策や、時代を象徴する重要な事象について詳察している。アメリカ外交史を扱う邦語の概説書には優れたものが多いが、その上でなお、本書の特長として指摘できることは数多くある。

筆者は、本書の冒頭で、①外交史をアメリカ史の一部として叙述すること、②アメリカ外交史をグローバルな国際関係の中に位置づけて叙述すること、③「受け手」(対象地域)の側からみたアメリカ像の変遷を叙述することを重視したと述べているが、実際、こうした問題意識は、本書のいたるところで感じられる。

このうち、評者にとって特に印象的だったのは、第一の「アメリカ史の一部としての叙述」である。例えば、本書では、アメリカの対外行動を規定する国内要因への注目が徹底されている。第2章には、アメリカによるテキサス併合のタイミングが(テキサス独立直後の1836年ではなく)1845年となった背景を、国内要因(奴隷州と自由州の均衡の問題など)から詳しく説明している箇所があるが、本書ではこのようなアプローチが各所で見られる。アメリカの対外行動は、国際要因からはうまく説明できないことも多々あるため、国内要因に注目する本書の姿勢は、アメリカ外交を学ぶ者にとっての模範にもなるであろう。

また、国内の論争を詳細に取り上げているのも本書の特長である。戦争への参戦や領土の併合などの大きな出来事のために、アメリカ国内では論争が繰り広げられてきた。こうした論争では、国論が賛成派と反対派に二分され、また、同じ立場でもその理由は様々であることが多いため、論争の全体像を正しく描写するのは困難な作業である。にもかかわらず、本書においては、数多くの事象に関する論争が丹念に描かれている。とりわけ、領土拡大を続けた19世紀アメリカで展開された各論争は、日本のアメリカ外交史研究では手薄になりがちな分野であるため、本書による詳察の意義は大きい。

加えて、先述の三点とは別に、筆者が冒頭で掲げた「連続性と非連続性」への注目も、本書の大きな特長である。各時代のアメリカ外交の特徴が、建国期から継承される伝統に含まれるものなのか、歴史のある時点から定着したものなのか、それとも他に例のない特異なものなのか。本書においては、こうした問題意識が随所に見られる。その意味で、トランプ外交の特異性を指摘する最終章の考察は、歴史的詳察を土台に展開されているものであるだけに、説得力と迫力に富む。バイデン政権発足後のアフガニスタンからの撤退や、ウクライナ戦争への対応を、筆者はアメリカ外交史の中でどのように評価するであろうか。読み終えた読者をそのような思いにさせるのも、本書の魅力と言える。

西住祐亮(中央大学・講)

『英文ジャーナル』第35号原稿募集のお知らせ  
*The Japanese Journal of American Studies—Call for Papers*

JAAS members are invited to submit proposals for papers to be included in the 35th issue (June 2024) of *The Japanese Journal of American Studies*. For the coming issue, we would welcome submissions related to “voices,” the issue’s special topic. Any paper which addresses this special topic is welcome. We would also accept submission of proposals that deal with any other topic that sheds light on aspects of American ways of life, society, history, literature, politics, economy, law, art and architecture, etc.

Proposals, consisting of a title and abstract (approximately 300 words), should be sent to the JJAS Editorial Committee by January 6, 2023 via email at [engjournal@jaas.gr.jp] as attached electronic files. Completed manuscripts will be due May 8, 2023 (maximum 8000 words, including notes) and should also be sent to the above email address. Papers must be written in English, based on original research, and previously unpublished. Authors may submit only one proposal per issue.

Takakazu Yamagishi, Editor, JJAS

『アメリカ研究』第58号「自由投稿論文」募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は2024年3月に第58号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿をお待ちしています。

1. 内容 アメリカ研究に関する未発表論文。前年度『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文が掲載された方は、本年度の投稿をご遠慮ください。また、同じ年度に、あるいは年度をまたいで『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することはできません。これはなるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚数 論文は33字×34行のレイアウトで19ページ以内（註を含む）。  
執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。http://www.jaas.gr.jp/journal\_guide.html
3. 原稿締め切り 2023年8月31日（木）
4. 提出 電子メールで年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお送りください。  
\*投稿希望者は、論文題目を2023年6月末日までに電子メールで、年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお申込みください。

年報編集委員会

『アメリカ研究』第58号「特集論文」募集のお知らせ

『アメリカ研究』第58号の特集テーマは、「アメリカと権威主義」です。趣旨文は次号（4月号）に掲載予定です。「特集論文」に応募希望の会員は、2023年6月末日までに、氏名・所属・論文題目および構想・資料などの説明（400字程度）を電子メールで、年報編集委員会宛て（nenpo@jaas.gr.jp）にお申し込み下さい。その際のタイトルは「『アメリカ研究』特集応募」と明記してください。

執筆要項は学会ウェブサイト参照のこと。http://www.jaas.gr.jp/journal\_guide.html  
原稿締め切りは2023年8月31日（木）。

年報編集委員会

アメリカ学会清水博賞第28回公募のお知らせ

アメリカ学会では、1996年度から故清水博会員および同夫人からの寄付金を基金として、「アメリカ学会 清水博賞」を設けています。この賞は、主として若手研究者が最初に発表した研究成果の中から、特に優れた作品を毎年数点程度選び、賞状と賞金5万円を贈るものです。

第28回清水博賞選考委員会は、2022年1月1日から12月31日までに出版される作品について、会員諸氏からの積極的な推薦（自薦・他薦）をお願いいたします。推薦作品につきましては、件名を「第28回清水博賞候補推薦」として、2023年1月8日（日）までに、清水博賞選考委員会宛にメール（shimizu@jaas.gr.jp および pcrses@flet.keio.ac.jp）にてお寄せ下さい（両方に宛ててお送り下さい）。

清水博賞選考委員会



## アメリカ学会中原伸之賞第4回公募のお知らせ

第4回中原伸之賞選考委員会は、2022年1月1日～12月31日に出版される作品について、会員のみなさんからの積極的な推薦（自薦・他薦）を受け付けます。推薦をいただく場合には、件名を「第3回中原伸之賞候補推薦」として2023年1月6日（金）までに、400字程度の推薦理由（書式自由）を中原伸之賞選考委員会 nakahara\_prize@jaas.gr.jp宛にメールでご応募ください。自薦の場合は3冊のご献本を学会事務局に郵送でお願い申し上げます（他薦の場合にも可能ならご献本をお願い申し上げます）。学会事務局は次の通りです。

〒550-0001

大阪市西区土佐堀1丁目4-8 日栄ビル703A あゆみコーポレーション内

アメリカ学会「中原賞選考委員会」

アメリカ学会では、故・中原伸之氏（公益財団法人アメリカ研究振興会理事長などを歴任）からの個人寄付金を基金とし、2019年度から「アメリカ学会 中原伸之賞」を設けています。この賞は、本学会員の第2作以降の単著（年齢制限なし）ないしは本学会員の最初の単著（この場合のみ出版時50歳以上であること）のなかから、日本、アメリカ、あるいは世界のアメリカ研究の水準を高めることに貢献できる、深い知見と新しい視座を提供する特に優れた研究書に、賞状と賞金5万円を贈るものです。

中原伸之賞選考委員会

## 新入会員（2022年7月10日現在）

今井麻美梨

立教大学（院）

史 じ 化

花岡修二

福山暁の星女子中学・高等学校

言 宗 人

丸山実里

一橋大学（院）

史 人 社

(\* 入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による)

## 訃報

佐藤宏子元会長（東京女子大学名誉教授）が2022年10月28日にご逝去されました。ウィラ・キャザーをご専門に米文学研究の発展に情熱を注がれた佐藤先生は、1998年6月から2年間にわたり会長を務められました。先生のアメリカ学会への長年のご貢献に感謝を申し上げるとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

## 編集後記

編集委員の末席に加わって3か月。これだけの伝統と規模、多彩な専門分野の会員の関わる学会の舞台裏を目にするのは初めてで、ようやく本学会の一連の刊行物の製造工程の片鱗が頭に入って来た。1年で学会誌2つに会報3回、内容も査読論文はもちろん、特集の企画にエッセイや新刊紹介、会務情報まで多岐にわたり、雲霞のごときメ切の大軍に襲われているような気にさせられた。

これだけのメ切を捌いてゆけるのも、編集委員会のこれまでの経験の蓄積、そしてそれを巧みに使いこなせる有志の委員や事務局の存在あればこそであろう。しばし、大学の行政や教育との違いに思いをはせてしまった。

（藤木剛康）

2022年11月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 前 嶋 和 弘

編集人 渡 邊 真理子

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5